

ラオスの平整経式腰機

柳 悦 州

はじめに

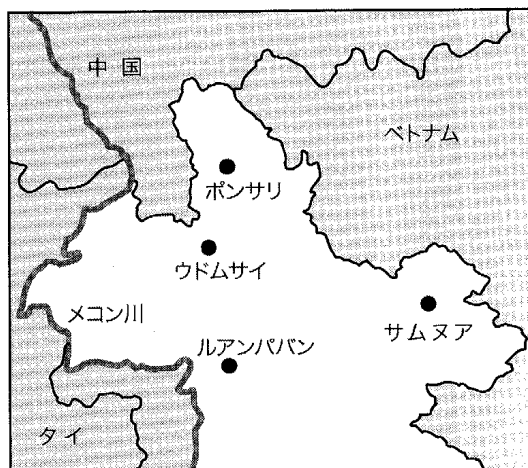
沖縄県立芸術大学附属研究所とラオス情報文化省文化研究所では「沖縄県立芸術大学附属研究所とラオス情報文化省文化研究所との間の学術協力に関する協定書」にもとづきラオスの織物文化調査を継続してきた。同国の腰機について、前報「ラオスの高機と腰機・細帯機¹」では、タリアン族、カムール族の輪状整経式腰機、モン族の平整経式天秤腰機等について報告した。

ラオス南部を中心に居住するタリアン族をはじめとするタオイ族・ラフ族等は経糸を輪状式に整経し、経糸は布幅と同じ幅に整える。前部経糸保持棒と後部経糸保持棒は足を伸ばして座った織り手の足裏と腰に固定され、その足裏と腰の張り具合で経糸張力を加減し織り進む。またラオス北部のカムール族の腰機は、輪状式に経糸を整経し、経糸は巻き取らずに輪状に伸ばしたまま、織り幅に整え前部経糸保持棒を床下の柱と柱に渡した横木等に固定する。後部経糸保持棒は織り手の腰に腰帯で固定し、織り手は腰の張り具合で張力を加減し織り作業を行う。前報で報告したこれら2種類の腰機は、経糸が平行であり、ほぼ布幅に整えられ織り作業が行われることに共通点があり特徴であった。

本論文では2001年²、2002年³、2003年⁴、2004年⁵と、ラオス北部ウドムサイ県とポンサリー県において調査したプノイ族、ラオセン族、カムー・オウ族の平整経式腰機について報告する。この腰機は平整経式で箎状の幅出し開口具を綜統の前側に備えており、幅出し開口具より前方の経糸は束ねられて杭に固定されている点に大きな特徴がある。今までこのような腰機の報告は、4年間にわたるこの調査に関係するもの以外に報告例を見ていない⁶。

アイヌのアツツシ織の織機には機枠が存在せず、またオオサと呼ばれる幅出し開口具が綜統の前方に備わっている。また経糸先端はひとまとめにまと

められて一本の杭に固定されている。これらの特徴は今回報告する腰機と共通する。アイヌの腰機はシベリア東部のアイヌ人でも使用されている⁷が、その他の地域での使用例はなかった。今回の報告は、アジアの東北端（アイヌ）と東南（ラオス）で類似した構造の機が存在していることを示しており大変意義深いと考えている。



ポンサリの位置

1. プノイ族の平整経式腰機

1999年度ラオス北部調査時、ポンサリ地方では立った姿勢で機織りをする民族がいるという話を聞いた。また道路も整備され外国人が陸路ポンサリに行くことが出来るようになったとの情報をもとに、ポンサリ調査を行おうと考えた。翌年度の2001年2月に予備調査として、前ラオス情報文科省文化研究所副所長カンペン・ケタヴォング氏と共に筆者と附属研究所久万田助教授でポンサリを訪ねた。ムアンサイで自動車を借り上げ230km余り北上し標高1450mのポンサリに着いた。ポンサリは山の稜線に広がるポンサリ県の県都である。ポンサリ県はラオス最北部に位置し、東側はベトナム、西側と北側は中国雲南省に接している。ポンサリでは現地のブントオ氏に案内をお願いした。

(1) ポンサリ市内機道具調査

ポンサリ市内に居住するペロン婦人（65歳）が10年前まで、腰機によって織物を織っていたとのことで訪ねた。ペロン婦人が大切に保管されていた機道具5種類について調査した。

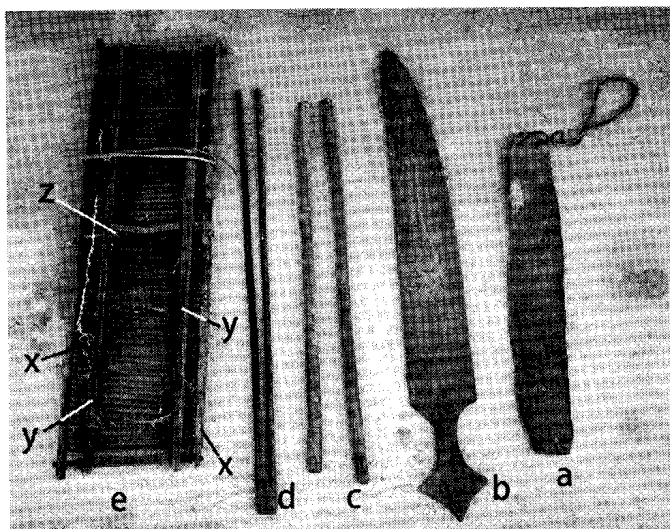


写真1 プノイ族の腰機用機具：腰帯-a、緯打具-b、綾棒2本-c、綜統棒-d、幅出し具-e

- ・腰帯：全長40cm、幅6 cm、皮製。

なめしが行われていない皮製であり、両端には紐を通す穴が2個ずつ開けられていた。片方には紐が通されていた。

- ・緯打具：全長74cm、幅7.2cm、最大厚さ1 cm、木製。

緯打具は断面形状が刀状であり、長さ13cmの持ち手が付いていた。10本/cmの線状痕が付いていた。

- ・綾棒（2本）：全長40cm、直径1 cm、木製。

- ・綜統棒：全長54cm、直径1.3cm、木製。

綜統棒は一つの部材より2本の丸棒が削り出されており、一端は連結されたままであり、その部分の幅は2.5cmであった。

- ・幅出し具：全長55cm、全幅15cm、厚さ1.5cm、幅出し用の串の間隔1.4本/cm、竹製。

幅出し具は調査当初は箴（緯打具）と考えていたが、詳細に観察をする中で、幅出し具であろうと考えた。両脇の部品（x）は半円形断面で取り外し可能であり、串状の竹棒の両端をカバーする構造であった。また内側の棒（y）は、3本の間隔保持具（z）によって間隔が設定されており、そのうち1つの間隔保持具は部品の中心に位置していることから、経糸が箴のようにyとyの中間に通されるのではないことがわかった。したがって経糸はxとyの隙間に通されるのであろうと予想したが、どのように使用するのか部品からは不明であった。

所有者のペロン婦人からの聞き取りでは、同婦人はプノイ族であり、この道具によって織っていたのは白布のみであり、白い布は脚絆として使ったという。また白布を藍で染めて頭巾としたとのことであった（写真2）。また、ポンサリ近郊で同様な道具を使って織物を織っているコメン村について情報を得た。



写真2 プノイ族の民族衣装を着たペロン婦人

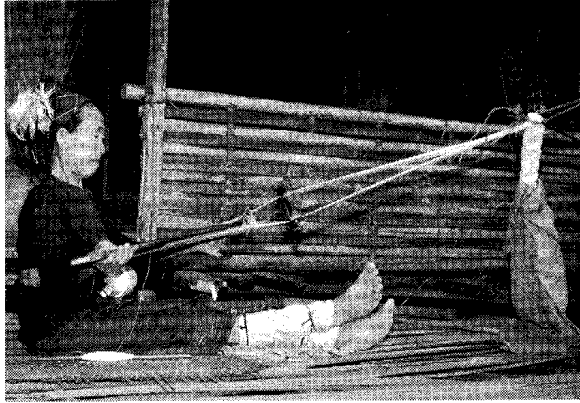


写真3 プノイ族サイ婦人の腰機（側面より）

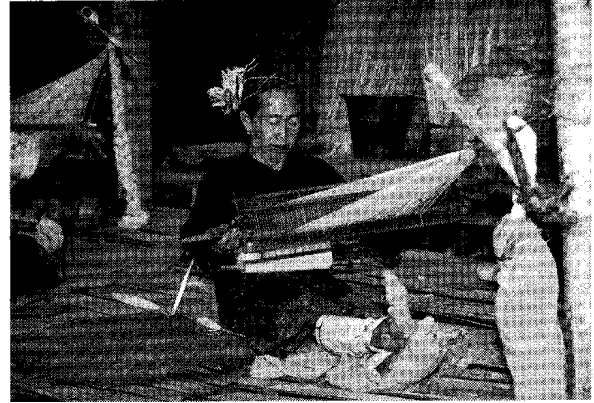
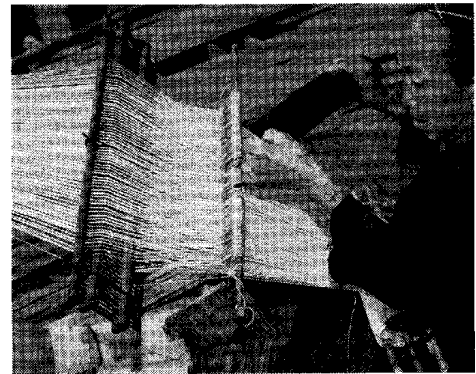


写真4 プノイ族の腰機（前方より）

(2) コメン村予備調査

翌2月13日、ポンサリ南方13kmの尾根の南斜面に位置するコメン村を訪ねた。コメン村はプノイ族の村であり45戸189人が居住している。住居は高床式であり竹製のテラスが各戸に付属していた。村長に面会后織機の調査を行った。

写真5 プノイ族の腰機
（綜統による開口操作）

サイ婦人（61歳）とトン婦人（59歳）が布で包まれた織り具を屋内からテラスに持ち出して機織り作業の準備が始まった。

包みを解き、束ねられた経糸の途中に位置する経糸保持棒を、テラスの柱の床面から高さ55cmにあらかじめ準備された縄に掛けて固定した。次に布巻棒を腰帯で織り手の腰に固定し、適当な張力が経糸に加わるように座る位置を調整し織り作業が始まった（写真3、4、5）。

経糸保持棒より先の経糸は束ねられて、つれたり引っかからないよう鎖編みにされ布袋に入れられていた。経糸保持棒と布巻棒の中間に写真1-eと同様な幅出し具が位置していた（写真5）。写真5上下2カ所の部材の間に経糸が通されていた。したがってこの部品は、束ねられた経糸を広げ経糸の幅を保つ幅出し機能と、中筒開口を行う開口機能を兼ねていることになり、以後本稿では「幅出し開口具」と呼ぶことにする。

写真1-eの幅出し開口具両端にみられるように装飾も施されており、またこの道具が他の道具に比べて使い込まれており、大切に扱われてきたことが

わかる。幅出し開口具は、幅は56cm、高14cm、経糸の上糸と下糸の間隔7cm、串は直径3mmでピッチ1.7本/cmで86本あり、経糸通し幅は38cmであった。

幅出し開口具の織り手側には輪状綜統が設置されている。綜統棒長さ55cm、輪状綜統長さ5cm。2台の機のうち、一方には綜統棒中央に紐で引き手が設置されていたが、他方の腰機の綜統棒には引き手がなく、直接織り手が綜統棒を持ち上げて操作していた。写真5の綜統棒は、写真1-dで示したU字型の綜統棒が破損し1本になったものであり、左端に四角い部分が認められた。緯打具は刀状であり、右手で操作していた。緯打具を経糸開口部に挿入後、経糸に直角に起こして緯入具を挿入し織り進んでいく。開口と逆開口操作における経糸の口開きは良く、スムーズに織り作業が進められていた。

経糸は糊付きの木綿糸、平整経式で長さは7尋(約8.5m)。緯糸も木綿で、布幅は25cmであった。織りあがった布は、脚絆、ショルダーバック、シャツなどに使用されるとのことであった。



(3) コメン村本調査

翌年2002年1月14日16時、およそ1年ぶりに再びコメン村を訪れ、翌日に織り作業を最初から見せてもらえるよう村長にお願いし快諾を得た。

その後村内を見学したところ、幅出し開口具の構造が異なる平整経式腰機で機織りをしていたので見せてもらう。写真6のように、平整経式腰機であるが幅出し開口具は、開口機能として2本の細い棒ではなく、直径10cmの1本の竹が串状の幅出し棒の中央に位置している構造であった。

写真6 太い竹筒が用いられた幅出し開口具



写真7 3本の竹棒による整経作業

整経作業

1月15日9時コメン村で、整経作業(写真7)から調査を始めた。整経長は4m、3本の竹棒(太さ2

cm、長さ40cm) を使い、一方の端は2本の竹棒を18cm離して打ち込み、4m離れた他方の端は1本の竹棒を打ち込んであった。中央には竹かごが置かれ、中に糊付き木綿単糸が認められて貯められてあった。整経作業は、1本の糸を順次両端の竹棒に掛けることで行われるが、近接して立てられている2本の竹棒の間で、整経された糸を1本毎に交叉させ綾が取られていた。所定本数の経糸が整経された後、綾部分は竹棒で出来た経糸の隙間に別の糸を通し、綾が失われないようにする。綾の反対側の1本の竹棒を地面から抜き、整経された経糸は鎖編みを行いな



写真8 整経後に経糸を鎖状に編み竹棒で止める

行いながら束ねてられる。およそ綾側に1.5mほど残した場所で、抜き取った竹棒を鎖編みの糸束に通しほどけないように止める(写真8)。この部分が次に経糸先端部分となり柱に固定されることとなる。

経糸の幅出し

綾を取った2本の竹棒を、経糸から抜け落ちないように、そのまま地面から抜き、整経された経糸と竹棒2本を持ったまま織り作業を行う家の床下の柱近くに移動する。鎖編みを止めた竹棒を、あらかじめ高床式住居の床下の柱に結びつけられていたロープに固定し前部経糸保持棒とする。織り手(昨年、2001年予備調査時と同じサイ婦人)は、経糸が伸びきる場所に敷物を敷いて座り、経糸端の輪の部分に通されている竹棒を腰帯の紐を使って腰に固定し後部経糸保持棒とする。

整経作業時に中間に位置し綾を取っていたもう1本の竹棒によって分けられている経糸の隙間を広げ、その場所に上下の押さえ棒をあらかじめ外した幅出し開口具を挿入する。幅出し開口具に備わる



写真9 幅出し開口具を経糸にセットする

竹の串は90本、直径3mm、長さ13cmであった。最初、経糸はまとめて幅出し開口具の中央部に配置してある。その後幅出し開口具の串と串の間に2本ずつ経糸を分配していく(写真9)。幅出し開口具の上面に位置する経糸も下面に位置する経糸も同様に分けていくことで経糸が綾の順に整理され、経糸の幅出しも行われる。また上下に分かれていることで開口保持具(腰機では中筒と称されている)の機能も果たしている。経糸の両側、すなわち織り布の両耳にあたる部分の経糸は、さらに幅を出すために1本ずつ入れられていた。

経糸がきれいに分配された後、竹棒を半円に割り裂いた上下の押さえ棒を、幅出し開口具の上下から串の端面をカバーするように挟み、上下をまとめて紐で縛り経糸がはずれないように固定する。

綜統作り

綜統仕掛け作りは、まず腰に固定した竹棒(後部経糸保持棒)で引き返す経糸の上面と下面の隙間に緯打具を挿入し、その緯打具を垂直に立てることから始まる。この作業によって、幅出し開口具の下面の経糸(下糸)が緯



写真10 輪状綜統を作る

打具の上面を通り、幅出し開口具の上面の経糸(上糸)は緯打具の下面に位置することとなる。すなわち幅出し開口具が正開口であり、緯打具によって逆開口が行われる。緯打具によって開けられた隙間に綜統糸をあらかじめ通し、緯打具によって持ち上げられた糸の上に綜統棒を持ち、経糸の隙間から綜統糸を引き上げて綜統棒に掛けて輪状綜統は作られていく。綜統糸は綜統棒の手前側で経糸をすくい、次に綜統棒の向こう側で次の経糸をすくうという作業の繰り返しで、振り分け式の輪状綜統(写真10)が作られていた。

機織り

綜統が完成後、織り作業が始まった。逆開口操作は輪状綜統を持ち上げることで行われる。綜統棒を持ち上げ、その綜統と幅出し開口具との間の経糸を緯打具で軽く叩くことで糸さばきを行っていた。また、綜統棒はまっすぐ

持ち上げず、右側を高く、また手前側に引き上げることで逆開口部を直接のぞき込むような姿勢（写真6）で緯打具を挿入していた。反対の開口操作は、幅出し開口具を綜統の近くに引き寄せることにより行う。緯糸は経糸同様に木綿糸であるが糊はつけられていない。緯糸は直径0.5cm、長さ43cmの竹製の緯入具に8の字状に巻き付け、緯打具にそって挿入される。



写真11 織り付け

織り手は膝を伸ばした姿勢で地面の敷物を敷いた上に座り織り進むが、経糸先端部の高さは78cmであった。布幅は17cmであり、幅出し開口具での通し幅は28cmであった（写真11）。

聞き取り

サイ婦人よりの聞き取りでは、この機で織る織物の用途は、男性用は民族衣装のズボンやシャツ、女性用は同様に民族衣装のヘッドスカーフ、巻きスカート（シン）、上着、脚絆、ショルダーバックなどである。

幅出し開口具には2本の細い竹棒が両側にあるもの（写真4）と、太い竹筒が中央に位置するもの（写真6）がある。使い方は同じであるが、前者の方が少し古いタイプとのことであった。写真4の道具は結婚前（40年以上前）に現在の夫が製作したものの。

すべての成年女性は機織りが出来る。サイ婦人は14歳から母に習って織物を始め、20歳で結婚した。最初からこの型式の機で織物を習い始めたという。現在では、子供たちは学校に行く者もあり、修学の状況に応じて織物を習うため、織物を習い始める年齢は一定ではない。

40年前から、白い布だけを織ってきた。民族衣装は白地で細かい縞が入る。以前は織り上げた白布を藍で染めていたが、20年前から染めなくなった。しかしまだ村内に藍が自生しており、琉球藍（キツネノマゴ科）と類似する葉を見せてもらった。

木綿は7月に種を蒔き、11月に収穫するという。綿繰り、綿打ち、糸紡ぎの道具と作業も見せてもらった。木綿以外の素材は現在織物として使用していない。ピエット（靱皮繊維、後述）は20年前まで使った。ショルダーバック用素材としてピエットを使っていたが、現在では農業用ビニール袋を裂いて撚りを掛け糸としてショルダーバックを織っている。

織る場所に忌避はなく、どこでも条件のよい場所で織り作業は行われる。織物作業に適するのは、米の収穫・脱穀後の12月後半以降3月までの農閑期である。焼畑稲作が主で、その他に茶（緑茶の産地として有名）、トウモロコシを栽培し水牛を飼っている。400年前からポンサリーに定住しているという。

2 ラオセン族の平整経式腰機

(1) ムアン・ワットタイ村

1月16日ポンサリから東方へ19km行くとウー川岸に着く。ウー川をチャーター船で12km程さかのぼりムアン・ワットタイ村に着いた。同村には山を越えて徒歩で行くことができるが自動車道



写真12 ウー川

はなく、船でのアプローチが主要な方法である。ウー川に面した東向き川岸の斜面に展開した72戸445人のラオセン（Laoseng）族の村である。

ウー川はラオス北部ポンサリ県と中国雲南省との国境から南に流れ、ルアンパバンでメコン川に合流する。静かで豊かな水量を誇るウー川流域は大きな谷が形成され、多くの民族が居住している。ウー川沿いに北から南へと民族が南下し、またウー川の東方ベトナム国境周辺の安南山脈に居住する民族が、西側のウー川流域の開けた地域に移動してくるといのように、ウー川の存在は北部ラオスの民族とその文化を考える場合に重要な意味を持っている（写真12）。

(2) ティップ婦人の腰機

ムアン・ワットタイ村では、石だらけの狭い斜面に高床式の住居が建ち並び、

その空間を利用し床下の柱や立木に経糸を固定し腰機による機織りが行われていた(写真13)。最大の特徴は、立った姿勢で機織りが行われていること。さらに幅出し開口具が備わっていることである。

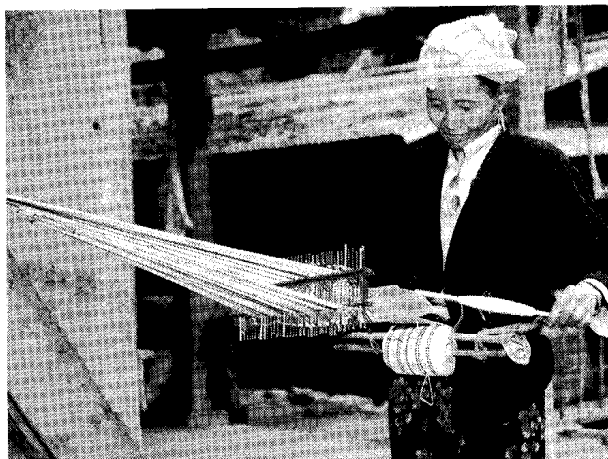


写真13 立って織るラオセン族のティップ婦人

ティップ婦人の平整経式腰機は、縄によって経糸の端が柱に結びつけられていた。その柱は斜面に建って

いる高床式住居に上がる階段とその上のテラスを支える支柱であった。腰帯は編み製品で、両端に布巻き棒を止める紐が付いていた。幅出し開口具は、幅31cm、高さ16cm、厚さ3cmで、37本の竹串が2枚の幅出し板に固定されていた。その串の両端には上下2枚の幅出し板の間隔を決めるために、幅出し板に挟まれた部分の幅が広い竹製の串が備わっていた(写真14)。コメン村の幅出し開口具のように、上下で経糸がはずれないように挟み込む押さえ棒は存在せず、写真

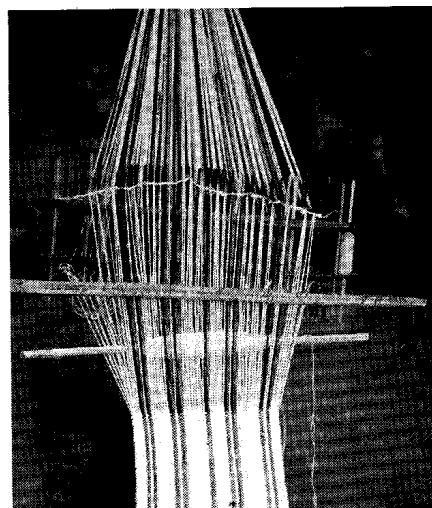


写真14 幅出し開口具と綜統、緯入具

14のように別の糸を一本一本の竹串に連続して巻きつけて、経糸がはずれないように止めていた。竹串のピッチは1.4本/cmであり、竹串の隙間に入れられる経糸の本数は一定ではなく、端から2 2 1 6 0 6 6 2 2 4 2 4 2であった。すなわち上糸39本が13単位に分けられており、平均すれば3本ずつのの経糸が竹串によって分けられていることになる。経糸の幅出し開口具への通し幅は21cmであった。

綜統棒は2本で構成されており、一方の端が連結され、ポンサリ市内で見た道具と同様な構造であった。2本の綜統棒に8の字状に綜統糸を掛けてあった。経糸は平整経式で、経糸は2本引きそろえの木綿糸、緯糸も2本引きそろえであった。布はショルダーバック用の経緯で布幅12cmであった。

ティップ婦人からの聞き取りでは、経糸は5尋で、鎖編みにせず、全部の

ばしたまま織り作業をするとのことであつた。衣類用には白無地の布を織る。通常は立って織るが、疲れたときは座っても織る。立って織る方が早く織れ、また力が入るので強く打ち込める。家の中では狭いので外で織物作業は行われる。およそ1尋が1日の機織り作業の目安である。

使用する材料は、自家で栽培する木綿と、靱皮繊維のピエットである。ピエットは農作業時に男女ともに使用する大型のショルダーバック用糸素材である。隣の家には高機が、機枠だけの状態で置いてあつた。幅の狭い布は腰機で織るが、広い布は箆を用い高機で織るといふ。高機は50年ほど前（一世代前）に低地ラオ人から習い使われるようになったが、現在ではほとんどの家に高機があるといふ。

ラオセン族は以前はカ・セン（kaseng）族と呼ばれ、ウー川東方のベトナム安南山脈から移動してきた民族である。中国ではトン族（𑜋𑜰𑜫）と呼ばれているとのことであつた。

(3) 木の下での腰機

斜面の上の方では、家の側に生える太い木に経糸端を固定し機織りが行われていた。ティップ婦人の腰機同様に平整経式腰機で幅出し開口具が備わり、斜面を利用し経糸に張力を加えて織り作業が行われていた(写真15)。布幅26cmであつた。機具は、ティップ婦人の物より大型(写真16)であり、ピエットによって無地の白布が織られていた。村内では、多くの腰機の存在を目にすることができ、腰機による織り作業が日常的に行われていることがわかる。



写真15 木に固定し立って織る腰機



写真16 幅の広いピエットを織る

(4) 座って織る腰機

帰りがけに、ウー川岸のムアン・ワッタイ村船着き場の砂地で座って同じ型式の腰機を織る婦人(写真17)がいた。平地では、プノイ族と同様な姿勢でも織り作業が行われていることがわかる。しかし経糸は伸ばしたままでプノイ族の様に束ねられて鎖編みにされてはいなかった。立って織るだけではなく、疲労の具合や環境によっては座って織ることも分かった。



写真17 座って織るラオセン族の女性

3 カムー・オウ族の平整経式腰機

(1) ハットナン村

予備調査時(2001年2月15日)ポンサリからウドムサイへの帰路、ハットナン村を通過した際、道沿いの家のテラスで老婦人が機織りをしているのを見つけ調査した。ウドムサイからポンサリ向けに60km程の国道沿いに位置する新しく出来たカムー・オウ族の村であった。2002年1月19日～20日に再び訪れ、コメン村と同様に整経作業から詳細な調査を行うことが出来た。

(2) 整経

3本の竹棒を用いて整経作業が行われた。竹棒の両端の距離すなわち整経長は4m、綾を取る竹棒は、片方の棒から7cm内側に打ち込まれていた。糸は縫り継ぎされた靱皮繊維のピエットであり、糸玉に巻いた状態で、内側から糸口を出して1本の糸で整経を行っていた。整経終了後2本の綾を取った竹棒はそのまま残しておく。

経糸の先端は高床式住居の柱に固定し、もう一端は、整経時に使用した竹棒をそのまま腰に固定し布巻棒とする。中間の綾棒で分けられた経糸の間に幅出し開口具が挿入される(写真18)。幅出し開口具に備わる薄板は、通常ラオスで作られている箴羽と近似する厚さ、材質であり本稿では箴羽と呼ぶことにする。箴羽の長さは6cmであった。箴羽の中央には開口保持棒(中筒)

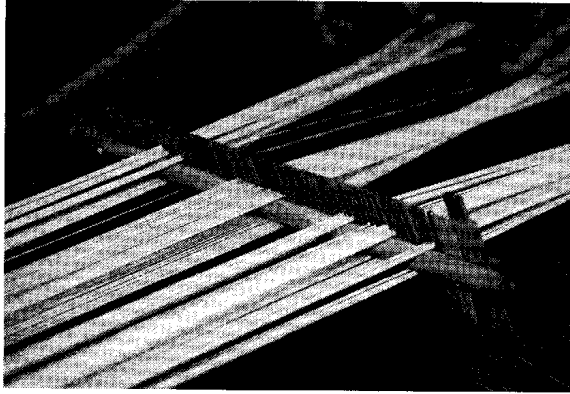


写真18 箴羽に1本ずつ経糸を分け入れる

様に等間隔に並ぶように経糸が整頓される。その後幅出し開口具の上下に押さえ棒がはめられ布を裂いた紐で上下を縛って固定した。布巻棒で上側に位置している経糸に綜統が掛けられ織り準備が整う。

の機能を果たす直径2 cmの竹棒が位置しており、その竹棒の間に箴羽は固定してあった。整経された経糸は、箴羽の隙間に1本ずつきちんと分配されていた。一对の上糸と下糸は同じ2枚の箴羽の隙間に配される。

箴羽に通された経糸は、等間隔に並んでおり、腰に固定した布巻棒にも同

(3) 織り作業

織り作業では、幅出し開口具で上下に分けられた経糸に、さらに幅出し開口具と綜統の間に竹製の開口保持棒（中筒、直径3 cm）が挿入され織り作業が行われていた（写真19）。幅出し開口具は織り作業ではほとんど動かされず、開口保持棒と綜統によって織り作業が行われた。したがって幅出し開口具の機能は、どちらかというところ開口部の記憶と経糸の幅出し機能であるといえる。幅出し開口具中央の竹棒の直径は2 cmで、開口保持棒の直径は3 cmであり、開口保持棒の方が太い。

(4) ピエット繊維

織り作業には靱皮繊維ピエットを撚り継ぎで使っていた。調査時に別の婦人が総にしたピエットを水で湿らし砧打ちのように棒で打っていた。茶色の水が流れ出ており、夾雑物の除去と柔軟性を得るために行うものであろう。その後米粉を煮て糊として糸につけ経糸とする。

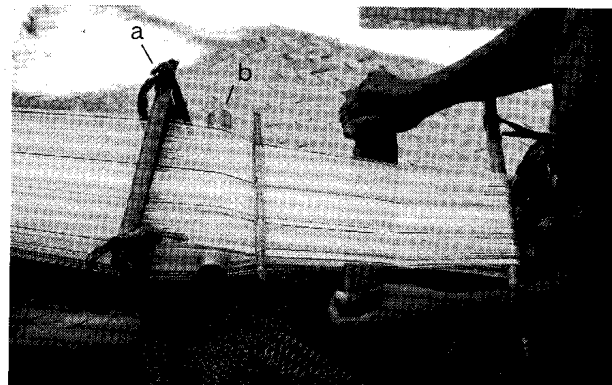


写真19 幅出し開口具-aと開口保持棒-bが備わったカムー・オウ族の腰機

箆羽と幅出し開口具は、村の男たちが作る。機織りの姿勢は座るだけである。この村には2年前に移動してきた。以前は44km東方の山の中で、そこには現在も2つの村が残り300人あまりが居住している。

(5) ブアンサム村

2003年3月5日、2004年3月6日、カムー・オウ族ブアンサム村の平整経式腰機（写真20）を調査した。ブアンサム村はウドムサイから10km北方の村である。36年前に東北方向の山地からブアンサム村へ移動してきたという。現在は焼畑はほとんど行わず、水田稲作が大部分である。伝統的には腰機

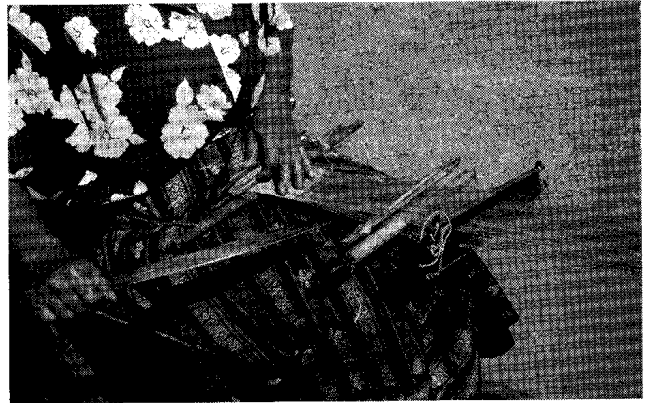


写真20 カムー・オウ族ブアンサム村の平整経式腰機

を使って衣服を織るが、現在では高機によってシンも織っている。

ブアンサム村の平整経腰機はハットナン村で調査した腰機と同じ型式で、幅出し開口具と竹筒製の開口保持棒が使用されていた。腰機では農作業などに使うショルダーバックを主に織っている。使う素材は2種類あり、一つはピエットであり、他方はクワ・ポイと呼ばれる樹皮から採る繊維である。クワ・ポイは、樹皮を叩いて繊維を取りだし織物用糸とするものであり、ピエットより荒く太い繊維であり、うす茶色である（写真21）。

(6) ショルダーバック

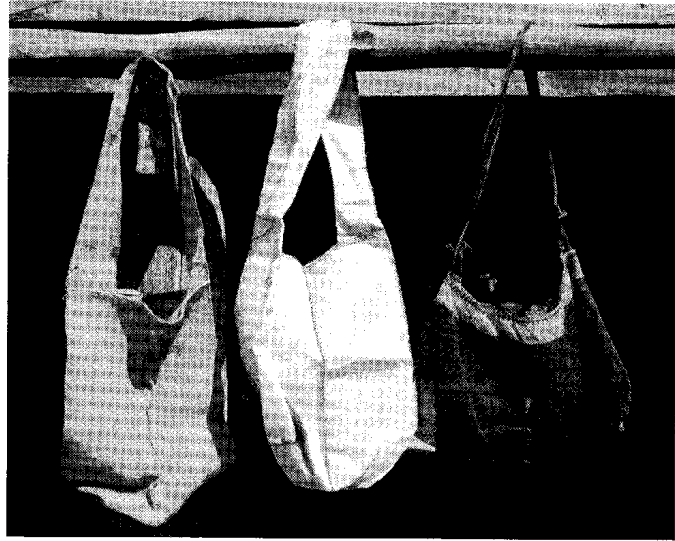
ショルダーバックには、織り布で袋部分を作り、織物で織った細帯のベルトを縫いつないだものと、網で袋部分を作り織物の細帯を編み込んで固定したものの2種類をカムー・オウ族は使用している（写真22）。

織り袋は、カムー・オウ族の伝統的



写真21 クワ・ポイの樹皮を叩いた直後- 左、ピエットの繊維- 右

なものであり、袋部分は平整経式腰機で織る。通常は2-3袋分まとめて織られる。また、細帯も腰機によって織るといふ。ピエットは小型のショルダーバックを織るための素材であり、クワ・ポイは大型のショルダーバック用の素材である。



ピエットによる網袋はカムール族の方法であり、この村に定住してから作るようになった

写真22 ショルダーバック：クワ・ポイ-左、ピエット（織り）-中、ピエット（編み）-右

という。網袋用の細帯は地機⁸によって織られる。この地機による細帯作り（写真23）は、カムール族の方法であるとのことであった。

前報（注1）ではショルダーバック用ベルトを織るためのラオス北部の細帯機として、杵機（カムール族 Sila 人）と腰機（カムール族）の調査を報告した。今回の地機（カムール・オウ族）も含め、ショルダーバックのベルト部分を織るためにラオス北部では杵機、腰機、地機とじつに3種類の機が使われていることになる。

また、このカムール・オウ族ブアンサム村では、伝統的な幅出し開口具が備わった平整経式腰機に加え、高機と地機という3つの機構造の異なる手織り機を、用途によって使いこなしている。クワ・ポイの樹皮繊維も興味深い。ピエットの織物や編みはラオスで一般に見ることができ、ラオ族以外の民族が利用していることは確認してきた。クワ・ポイについては初見であり再調査が必要であると考えている。

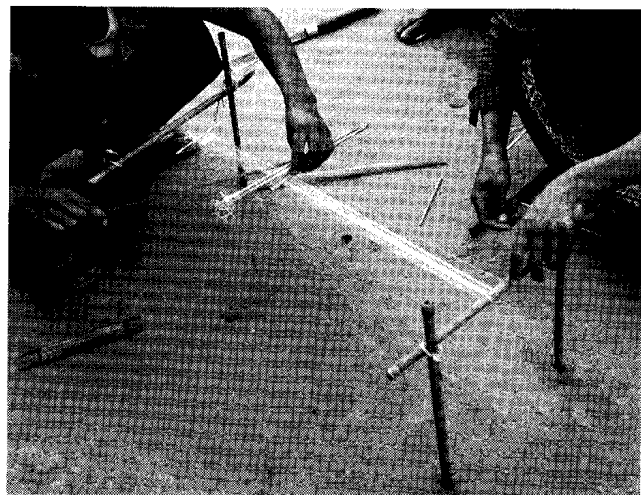


写真23 地機による細帯織り作業

4 まとめ

プノイ族、ラオセン族、カムー・オウ族と、3民族の平整経式腰機を調査することが出来たのは幸運であり、また大きな成果であったと考えている。この3民族で使われている腰機は、幅出し開口具を備え、経糸先端で経糸が束ねられており、経糸の形状が三角形である事が大きな特徴である。

経糸形状が三角形の腰機の場合、経糸先端は束になっているため織り幅まで経糸の幅を広げる必要がある。ラオスの3民族の場合には幅出し開口具が使われている。特に注目されるのは、幅出し開口具上下の固定具（図1-x）が可動式で取り外し可能である点である。また、装飾が施され大切にこの道具が扱われている点にも注目したい。この幅出し開口具は明確に確立された形態と機能を持っており、古くから使われてきた道具であると考えられる。プノイ族、ラオセン族、カムー・オウ族は高地ラオ族に属し、現在の多数民族である低地ラオ族のタイ・ラオ族より以前にこの地域に居住していた民族であり、この腰機が古い織物文化要素を伝えていると考えられる。

また使用されている繊維は、靱皮繊維のピエットやクワ・ポイ、木綿であり、ラオ族が一般に高機で使用している絹ではないことも特徴である。クワ・ポイのように樹皮を叩いて繊維を取り出す方法は余り知られていない。ピエットとクワ・ポイは、ともに太い靱皮繊維であり、その点でもアイヌのアツシ織りと共通性がある。

インドシナ半島の腰機は、今まで経糸は平行に準備されているものが一般に知られてきた。それはラオス南部のタリアン族などの腰機と、カムー・ルー族等の腰機であり前報（注1）で報告した。またタイ北部カレン族はカムー・ルー族の腰機に類似する腰機を使用している。東南アジア島嶼部では、インドネシアやフィリピン・台湾等の諸民族の腰機が知られているが、経糸が平行で経糸形状が四角形である機以外は報告がない。

この腰機と共通する構造である平整経式腰機で輪状綜統の前方に幅出し開口具を備える腰機は、アイヌのアツシ織の腰機として知られる東アジアの腰機がある。ラオス北部と東アジアに共通する構造の腰機が存在することは実に興味深い。中国中央部には、このような構造の腰機は存在していない。前田によれば中国南部貴州省を中心とした地域のトン族とイ（彝）族では、

経糸形状が三角形の腰機が使用されている⁹と報告しているが、本報告のような幅出し開口具が備わっていない。イ族の一部はロロ族と呼ばれており、ラオスポンサリ地域にも居住している。2003年にポンサリ県北部でロロ族の腰機による

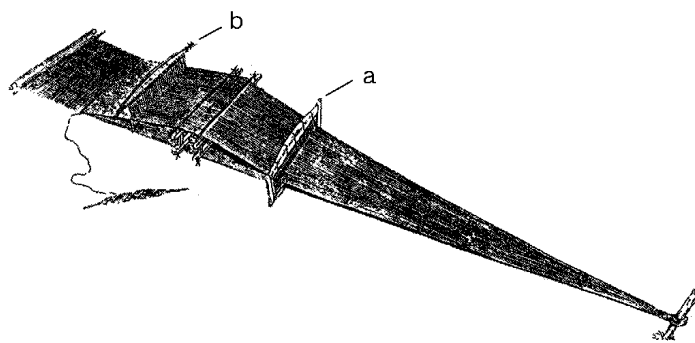


写真24 アイヌの腰機 オオサ(幅出し具)-a、輪状綜統-b
[A. A. ポポフ 19～20世紀第一四半期のシベリア諸民族における編物と織物(1) 注(7) P.174]

細帯織物の調査を行うことが出来たが、幅出し開口具は確認出来なかった。吉本によれば、アイヌ型の腰機は東アジアでのみ認められる¹⁰と発表している。ラオセン族と中国のイ族の関係も、確認する必要がある。

アジア全体を考えた場合、インドシナ半島から東南アジア島嶼部には四角形の腰機が存在し、貴州省からラオス北部に三角形の経糸形状の腰機が存在していることになる。また東アジアにアイヌの腰機として三角形の腰機が存在する。アジア大陸の北側を東端から西方にたどると、アイヌの腰機が東端に分布し、その西側には同じように経糸が三角形ではあるが地面に杭を打って張力を加える地機が存在し、カザフ人、トルクメン人、ウズベク人、タジク人、アゼルバイジャン人等の民族が使用しており、筆者は1998年、1999年と調査を行った¹¹。また中国青海省とチベット自治区のチベット族も同様に経糸形状が三角形の地機を利用しており2001年に調査を行った¹²。

したがって中国の周辺地域の東北地域から西側、さらに南側へと、三角形の経糸形状をもった腰機や地機が取り囲んで存在していることになる。ポンサリ地域は雲南省に食い込むような位置にあり、雲南地域にあると考えてもよい。雲南地域には多数の民族と民族文化が集まっていることが知られている。日本の基層文化との関わりも深い。沖縄をはじめとして日本で使用されている天秤腰機以前の手織り機がどのような構造であったのか、アイヌの腰機とラオスの腰機を結びつける経路を中国の周囲を西回りに結ぶのではなく、東回りに考えることが出来ればさまざまな可能性が考えられそうであり、今後の研究課題としたい。

注

- 1 柳悦州「ラオスの高機と腰機・細帯機」『沖縄芸術の科学』第13号、pp.171-181、2001年、沖縄県立芸術大学附属研究所。
- 2 2001年2月1日～19日、ラオス北部ルアンナムタ地域とポンサリ地域織物調査（調査者：附属研究所柳・久万田助教授）。
- 3 2002年1月9日～2月3日、ラオス・ポンサリ地域（調査者：柳、自費参加：吉本忍国立民族学博物館教授、附属研究所共同研究員 山田葉子）とラオス南部織物調査（調査者：柳）。
- 4 2003年2月20日～3月17日、ラオス・ポンサリ地域織物調査（調査者：柳）、ラオス中部地域織物調査（調査者：柳・久万田、自費参加：山田）。
- 5 2004年3月4日～13日、ラオス織物旅行（調査者：柳）。
- 6 今回報告する腰機の一部については「ラオスの腰機・シルクロードの地機」として沖縄染織研究会で2001年7月に柳が発表した。
- 7 ポポフ「19～20世紀第一四半期のシベリア諸民族における編物と織物（1）」萩原眞・長崎郁訳、北海道北方民族博物館紀要、11、pp.173-175、2002年。
- 8 ラオスで地機が織られているという情報は、国立民族学博物館助手檜永真佐夫氏がラオスで地機を撮影し、同博物館教授吉本忍氏が筆者に2002年11月に提供していただいたものである。ただ、民族名や撮影場所等が不明であった。同時に提供していただいた写真に、すでに調査したカムー・オウ族の腰機と近似する機が写っていた。したがって地機もラオス北部で使われているだろうという予想があった。
- 9 前田亮『手織り機の研究』p.144-145、紫紅社。
- 10 吉本忍「腰機から高機へ：東アジアと東南アジアの手織り機の類型と分布」東アジアと東南アジアの織物文化の基層と展開、1996年10月、国際シンポジウム発表、国立民族学博物館、大阪。
- 11 吉本忍・柳悦州「シルクロードの織機」『シルクロード織機研究』シルクロード学研究センター紀要、13、pp.165-288、2002年。
- 12 チベット織物調査は2001年7月22日～8月11日、檀原考古学研究所助成研究として行われ、調査参加者は泉森皎、吉本忍、柳悦州。